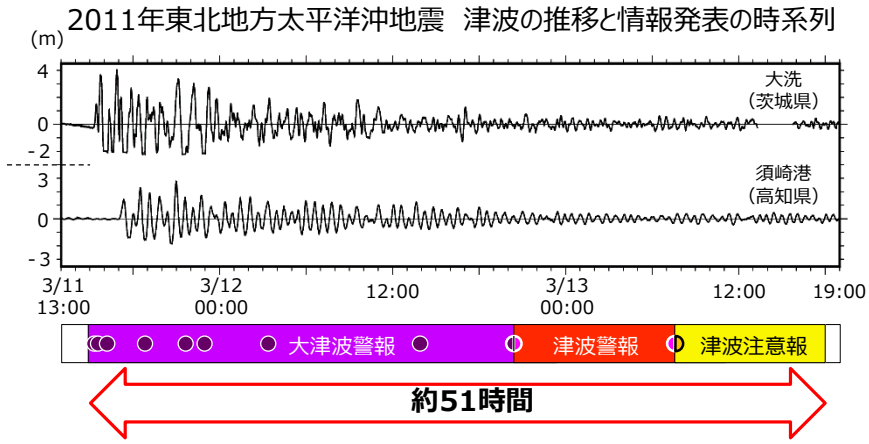
長時間継続する津波に関する情報提供のあり方(報告書)概要

検討経緯

○ 南海トラフ地震、日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震をはじめとする大規模地震に起因する津波は、減衰までの時間が長時間となるため、その間の防災対応も長く続くことが想定される。

○ 避難の継続や人命救助活動等の防災対応に資する観点から、津波の推移に応じた効果的な情報提供のあり方や、普及啓発で取り上げるべき内容について検討。



長時間継続する津波の時間的推移に応じた情報提供のあり方

○ 津波警報等に加えて、津波の今後の見通しや実況についての情報提供を充実することが有効。

⇒詳細は次ページ

○ 住民避難の観点では、既に避難した人々が危険な地域に戻らないような内容・方法で情報提供を行う必要。

○ 人命救助活動等の防災対応を行う防災機関に対しては、人員配置や活動内容、被災リスクの高い地域での活動の判断を行う材料として、気象庁から発表する情報を丁寧に解説することが重要。

普及啓発で取り上げるべき長時間継続する津波の特徴や留意事項

○ 長時間継続する津波について、適切な防災対応につなげるために事前に知っておくべき特徴等を整理。

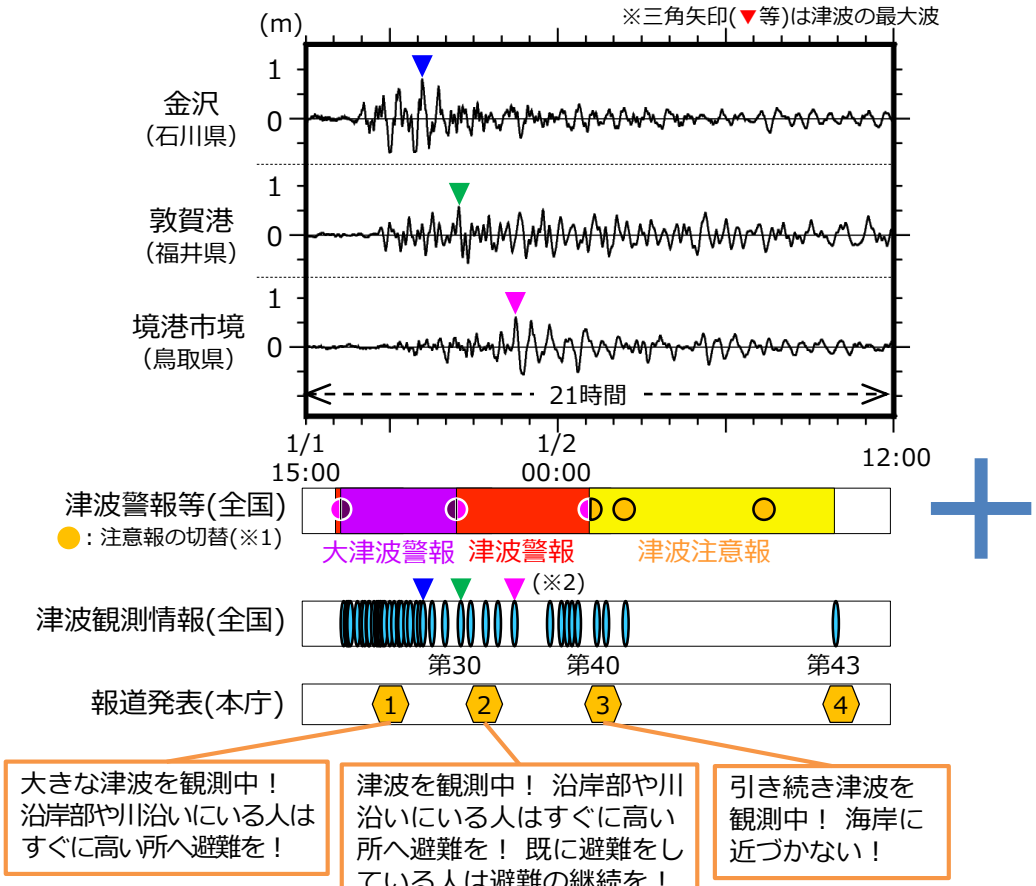
○ 発生頻度が低いことから、気象庁が発表する情報の意図や発表タイミング等について、自治体等の防災関係機関と共通理解を得るために、事前かつ定期的に説明・対話することが重要。

長時間継続する津波に関する解説の充実について

○ 長時間継続する津波については、過去事例や天文潮位を考慮した今後の見通しの解説、津波警報等の継続根拠や津波の実況の推移に関する解説について充実を図る。

令和６年能登半島地震の事例

津波の波形と、津波に関する情報発表の状況



※1 ： 警報・注意報の切替時には予測情報(*)を併せて発表
(*)各地の満潮時刻・津波到達予想時刻、津波の高さに関する情報

※2 ： 三角矢印は、3地点それぞれの津波の高さの情報が最後に更新されたタイミング
（▼金沢／▼敦賀港／▼境港市境）

解説をさらに充実する事項(※3)

⬣ 報道発表の号数

② 津波が継続する見込みを、過去の事例等を基に解説

（例）1983年日本海中部地震や1993年北海道南西沖地震という日本海で発生した過去の同規模の地震による津波の観測記録から、地震発生後少なくとも半日から１日程度は津波の高い状態が継続する見込み。

※過去に同様の事例が無い場合等、解説ができない可能性があることに留意

③ 次の満潮の前に、潮位が現在より高くなる旨を注意喚起

（津波の減衰傾向が緩やかな場合）

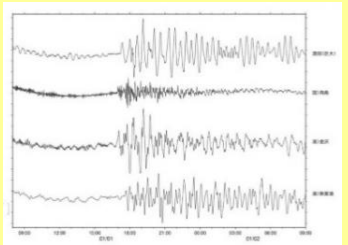
（例）北海道から中国地方の日本海沿岸地域では05時頃から次の満潮を迎えるため、津波が満潮と重なると潮位が現在より上昇する可能性がある。

② 津波警報等の継続根拠について解説

（例）まだ減衰せず大きな津波が観測されている。シミュレーション結果とも概ね一致していることから津波警報を継続している。

②③ 津波波形を用いて、津波の実況の推移を解説

（例）現在も引き続き大きな津波が観測されている。津波が一時的に小さくなっている地域もあるが、再び上昇している観測点もあるため、避難を継続して欲しい。



※3 ： 解説の例文は令和6年能登半島地震の事例を仮定したもの